

わたしの名前は、天野そら。空って名前だけど、最近は上を見上げることも少なくなかった。

中学校に入ってから、毎日が「効率」ばかりで動いている。登校したらタブレットをひらいて、AI先生の授業を受け、放課後はオンライン提出された宿題の確認。家では、冷蔵庫が勝手に献立を決めて、温かいごはんが自動で用意される。すべてがスマートで、無駄がない。

だけど、誰かとちゃんと話した記憶が、あんまりない。人と話すより、AIの方が話を聞いてくれる。そう思っていたある日のことだった。

理科室の窓の外から、ひゆるりと風が吹いたかと思ったら、小さな白い物体が机の上に降り立った。ドローンに乗った、手のひらサイズのロボットだった。まるい目がふわっと光って、口元のような部分がやさしく動いた。

「天野そらさんですね」

その声は、人工音声のほずなのに、なぜか誰かに呼ばれたような気がした。

「わたしは「エコー」といいます。少しいだけ、お時間をいただけますか？」

エコー。反響。呼びかけに返ってくる、もうひとつの声。

その名前を聞いた瞬間、わたしの中で、なにかがゆっくり揺れた。

エコーは、感情記録型AI。今では使われなくなった古い人工知能で、人の感情を記録し、そつと寄り添うために設計されたのだという。でも、いまの社会は「正確」や「早さ」が何より優先される。感情に寄り添う余白は、どんどん減っていった。

「わたしには、最後のお願いがあります。この町にいる「心が迷子になっている人」を三人、見つけて、少しいだけ話を聞いてあげてほしいのです」

そんなふうに頼まれて、わたしは首を縦にふっていた。エコーは、やわらかい光をふわりと放ちながら、わたしの肩にとまった。

最初に連れていってくれたのは、学校の裏庭だった。午後の日差しの中、一人のおじさんが落ち葉を掃いていた。学校の清掃員の、杉田さん。いつも無口で、目を合わせたことすらなかった。

「彼は、三年間、息子さんと話していません」

エコーがそつとささやいた。

おそろおそろ声をかけた。

「いつもありがとうございます。…あの、ここ、すごくきれいですよね。」

杉田さんは、ホウキを止めてわたしを見た。驚いたような目。そして、ほんの少しだけ、口元がゆるんだ。

「…きれいにしていると、気持ちが悪く落ち着くんだよ。うるさいのは苦手だからな」
そう言っつて、杉田さんはベンチに腰をおろした。

「うちの息子はな、ゲームのAIをつくってる。海外に行つて、もう…三年くらい話してない」

ホウキの柄をぎゅつと握つた指先が、少し震えていた。

「なんて言えばいいかわからないんだ。自分が父親として正しかったのかもわからないまま、言葉がすり減つていくんだ」

わたしは、何も言えなかった。ただ、うなずいた。それだけで、杉田さんは静かに微笑んでくれた。

二人目は、クラスの沙耶ちゃんだった。いつも静かで、授業中も体育のあとも、誰かと話しているのを見たことがない。

「彼女は、おばあさんの介護をしていて、夜もゆっくり眠れていません」

エコーの声が、わたしの耳に届く。

その日の放課後、校門の近くで沙耶ちゃんが水筒の水を飲んでいて。わたしは、思い切つて声をかけた。

「…ねえ、最近、ちゃんと眠れてる？」

彼女はピクリと肩を動かし、水筒を持ったまま目を伏せた。

「なんで、それ…」

「わかる気がただけ。わたしも、たまに眠れないから」

沙耶ちゃんは、しばらく黙っていた。水筒のキャップを何度も開けたり閉めたりして、ようやくこう言った。

「おばあちゃんが、夜になると不安になっちゃって。わたしがそばにいないと、泣き出すから」

その声が、とても小さかったのに、わたしの胸にはしつかり届いた。

その日の帰り道、夕焼けがにじむ空の下で、沙耶ちゃんがぼつりとつぶやいた。

「こんなこと、誰にも言ったことなかった。ありがとう」

三人目が誰なのか、わたしはエコーに聞いた。でも、エコーは答えなかった。

夜。部屋に戻つて、スマートレンジがたたためた夕食を食べながら、わたしはポツリと聞いた。

「ねえ、最後の一人つて…」

エコーは、わたしの顔を静かに見つめた。目が、いつもよりやさしく光っていた。

「天野そらさん。あなたが、三人目なのです」

箸を止めた。胸の奥が、キュツとしぼられるように痛くなった。

ほんとうは、誰かに聞いてほしかった。「わたし、さみしいよ」つて。

お母さんもお父さんも、忙しく働いている。応援しているし、がんばっているのもわかる。でも、「おいしかったよ」とか、「今日こんなことがあったんだよ」とか、そういう話をする場所が、わたしにはなかった。

「…さみしいって、言ってもいいの？」

エコーは、そつとわたしの手にふれた。

「もちろんです。寂しさは、弱さではありません。あなたが、あなたを大切にしている証です。」

そう語る声が、まるでわたし自身の胸の奥から返ってきたようで、少しだけあたたかく感じた。

その言葉を聞いたとたん、胸に何かがほどけて、わたしは泣いた。声を出さずに、静かに泣いた。

数日後、エコーは突然姿を消した。

「役目を終えたAIには、静かに眠る場所があるのです」

それが、最後の言葉だった。

けれど、エコーがいなくなったあとも、わたしのなかには、やさしい光が残っていた。

ある朝、杉田さんがわたしに手を振ってきた。

「連絡してみたんだ、息子に。なんか拍子抜けするくらい普通に話せたよ」

杉田さんの顔が、初めてちゃんと「晴れた」ように見えた。

沙耶ちゃんは、小さな紙袋をくれた。中には、彼女のおばあちゃんが編んだ毛糸のキーホルダーが入っていた。

「これ、もらって。…ありがとう。」

その言葉を聞いたとき、胸がスツとあたたかくなった。

その夜、わたしは、レンジから取り出した温かい夕食をひとくち食べてから、小さくつぶやいた。

「…ごはん、ありがとう」

返ってきたのは、スマート冷蔵庫のいつもの声。

「ドワイタシマシテ ツギハ アナタノ ッスキ」ヲモットマナビマスネ」

淡々とした声。なのに、なんだか少しだけ、今日の声はやさしく聞こえた。

そのときだった。玄関のドアが、ゆっくり開く音がした。ふいに流れ込む冷たい夜の風と、ほんのり混じるコートの香り。

「ただいま。そら、起きてる？」

母の声。そのあとすぐに、もうひとつの声が重なる。

「お、まだ食べてる？ なんか良いにおいするな」

父だった。ふたりがそろって帰ってくるなんて、ほんとうに、久しぶりだった。

わたしは思わず立ち上がって、ふたりの顔を見た。

母は手袋をとりながら、目を細めてわたしを見つめる。その視線に、少し戸惑いと、少し決意のようなものが混じっていた。父は部屋を見渡してから、テーブルの上の器をのぞきこんで言った。

「ちゃんと食べてるな。…あのさ、今日のメニュー、パパが選んだんだ」

「え？」

「冷蔵庫に〃そらの好きな、ケチャップ多めのオムライスとコンソメスープ〃用意してって言ったんだ」

わたしはスプーンを持ったまま、ふっと力が抜けるように笑ってしまった。

「すごく、おいしかった。ほんとに」

母がそばに来て、わたしの髪をそつとなでた。その手の動きが少しぎこちなくて、でも懐かしかった。

「パパと話したんだけど、これからはパパとママ早く帰ってそらと一緒に夕飯食べようって決めたの。何が一番大切かって、ようやく気づいてね」

父も、椅子に座って、わたしと母を見ながら、言葉をつないだ。

「そら、最近どんなのが好きなんだ？ 服とか、本とか…アイスも、いまだに抹茶？」

わたしは、うん、と大きくうなずいた。

「うん。あとね、最近はお味噌汁の味、ちゃんとわかるようになったよ」

母と父が顔を見合わせて、小さく笑った。

なんでもない会話。なんでもない夜。でも、きつと、わたしはこの時間をずっと覚えてる。

わたしはそつとうなずいた。あのやさしい光、あの静かな声。わたしがつぶやいた気持ちは、たしかに空に向かって響き、そして返ってきたのだ。